

千夜一夜の頭痛物語

片側の眼元がピクピクするけど、これって疲れ目のせい？
片側眼瞼痙攣という疾患 前編

文 清水俊彦

text by Toshiko Shimizu

皆様の中には眼を使い過ぎる、疲れた時に、片側の目じりがピクピクと無意識に痙攣したご経験のある方は多いのではないかと思います。大抵の場合、眼を一時的に休めたり、眼元を冷やしたり、また睡眠をとることで翌日には改善していることが多いです。しかし、数日間続くような際にはさすがに心配になり、眼科を受診し、「疲れ目のせいだ、特に心配はない」と言われビタミン剤や点眼剤を処方されていることが多いようです。

年末に左眼瞼痙攣が持続、
3日後に左顔面神経麻痺を発症した60歳代女性



左鼻唇溝が消失、
口角より唾垂、味覚障害を
伴い、閉眼も不可な状態
(赤丸印部位)

しかし、近年、この片側眼瞼痙攣という病態の原因の一つに、顔面神経の大本のサテライトである神経節に潜んでいる带状疱疹ウイルスの再活性化が挙げられています。この带状疱疹ウイルスは元来小児期に罹患した水痘のウイルスが脳神経や脊髄神経の神経節に住み込み、通常はおとなしいのですが、何らかの原因で宿主である人体の免疫が低下した際に、再度元気を取り戻し（再活性化）、神経節内から異常な情報を発するのです。

確かに、疲れた時に

は人体の免疫力は低下するため、再活性化が起こりやすいので、あながち疲れ眼という表現は間違いではないかもしれせん。しかし、通常は1日くらいで治まるものが、2〜3日続く、もしくは痙攣の度合いが日増しに強くなるような際には早期に带状疱疹ウイルスの鎮静化を図るべく抗ウイルス薬を服用しなければ、最悪1週間ぐらい経過後に突如、顔面神経麻痺に移行することがあるので注意が必要です。

人体の免疫力の低下は、冬の寒さに耐え抜いた春先や夏の暑さから解放された秋口、そして多くの人々が多忙となる年末年始に集中して起こることが多く、この時期には疲れ過ぎず無理をしないことが肝要です。また新型コロナウイルス感染後、もしくは頻回の新型コロナウイルスワクチン接種後の人体の免疫グロブリンのバランスの崩壊による带状疱疹ウイルスの再活性化により起こることもあるので注意が必要です。顔面神経麻痺はこのウイルスの再活性化が神経節のみならず、顔面神経管という頭蓋骨のごく狭い孔を通過して顔面の表情筋に分布する顔面神経全体に及び、神経の腫れが起こり、結果、この狭い孔の中で神経が圧迫されることにより引き起こされます。そのため、発症後

遅くとも3日以内の抗ウイルス薬と神経の腫れをとるための副腎皮質ホルモン剤の投与が必要です。治療が遅れると恒久的な顔面神経麻痺を残すこともあるので

す。今回はこの片側眼瞼痙攣の治療法および脳内の異常により起こる別の原因についてお話しします。

Profile

日本脳神経外科学会認定医、日本頭痛学会監事を歴任。日本頭痛学会認定専門医。東京女子医科大学病院脳神経センター頭痛外来客員教授、学校法人東京女子医科大学 評議員、獨協医科大学神経内科学講座臨床准教授、一般社団法人グリーフケアパートナー理事。

ほかに、汐留シティセンターセントラルクリニック、阿見第一クリニック、小山すずきの木クリニック、伊豆大島医療センターの頭痛外来を担当。昭和61年3月日本医科大学卒業。学会活動をはじめ、NHK「きょうの健康」「クローズアップ現代」など、テレビ出演も多い。「頭痛女子のトリセツ」（マガジンハウス）をはじめ、頭痛関連の著書多数。



新刊「ウルトラ図解
おとなと子どもの頭痛」
監修/清水俊彦
法研 (本体1600円+税)
2月18日(火) 発売

